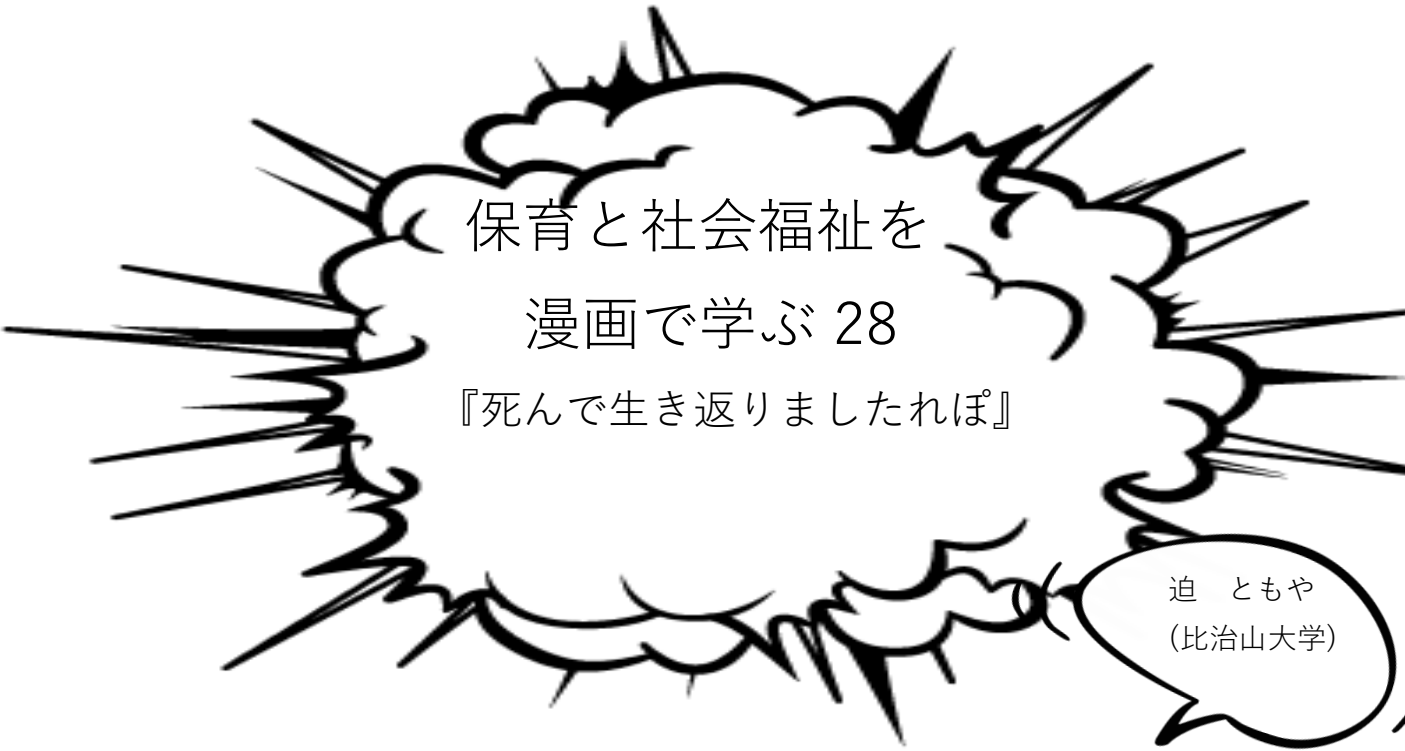




保育と社会福祉を 漫画で学ぶ 28

『死んで生き返りましたれば』

迫 ともや
(比治山大学)

2年ほど前からとても体調がわるく、目眩や発熱、寝込むことは日常茶飯事になりつつありました。そのうち、固形のものが食べられなくなりスポーツ飲料のみで過ごすようになりました（その①より）。

こんな書き出しで始まる村上竹尾さんの『死んで生き返りましたれば』。気が付くと村上さんは人影のようなものから名前を呼ばれており、「ここがどこかわかりますか？」「ご自分がどういう状態か知りたいですか？」と語りかけられています。作者は「このときわたしは、これは死の告知だと思いました」と書いています。不摂生がたたったのか、異常な血糖上昇と血液が酸性に傾く糖尿病ケトアシドーシス、筋肉が壊れて中の成分が血液中に漏れ出す横紋筋融解症、さらに急性腎不全や肺炎、敗血症などが起こり、心肺停止にいたったそうです。

二週間意識がない状態で ICU に入れられて透析を受け続け、村上さんは奇跡的に回復しましたが、ICU を出て三日後に、脳血管浮腫によって再び昏睡状態に。さらに二週間後、意識は戻ったものの視覚を司る脳の後頭葉が腫れたために目が見えなくなり、唸り声をあげて暴れる状態に。あまりにひどいのでベッドにくくりつけられてしまいます。病院スタッフに喋りかけられても意味がわからず、男性の声がしたら「さんぽん」、女性の声がしたら「あいはらさん」と答えていたそうです。

村上さんの入院中、社会福祉士と精神保健福祉士の資格をもつ妹さんが付きそい、支えてくれていました。ある日、何がきっかけだったのかは分からないまま、急に村上さんの意識が戻ります。家族も主治医も驚く回復ぶりでした。しかし、はっきり見えてきた妹さんの顔にはなぜか無数の線が描かれており、さらには「四角いものの区別がつかないし、大小も分からない」という不思議な脳の誤作動が起こります。

手に持った iPhone の四角い充電器を、iPhone そのものと認識したり、病室のトイレで看護師を呼ぶ四角いボタンと、便座を拭く消毒液が入った四角いボトルの区別がつかないような状態に。「人の顔のパーツが顔から逃げ出したり、二重に見えたり消えてしまったりする」症状も起こります。さらに、部屋の中に大きなトカゲが見えたり、寝ているお腹の上に何人もの足が見えたり…幻覚なのは分かるのに、どうしたらいいのか分からない状態。においの刺激が部屋の色合いを変える共感的な症状も出てきた

そうです。

漫画やイラストの仕事をしていた村上さんとしては、視覚がおかしくなり、ものの外観が捉えられなくなることは、死活問題です。村上さんは回復後、ブログに次のように書かれています。

入院時は寝たきりだったのでおむつをしていたのだけど、そのおむつのパッケージに書かれた文字列が、青と黄色のおだやかで機械的な模様に見えた。もちろん書かれた文字が本当は黒い文字なのも認識できる。意味もわかる。文字を追わなくてもぱっと見て、それが何を示しているかがわかる。

そしていつからかははっきりわからないが、同じような時期に、嗅覚に対する誤作動や、四角が区別できない誤作動もなくなっていた。

その頃、脳の腫れはおさまりつつあって、感覚の誤作動も元の範囲におさまったのだった。

（「自閉傾向と共感覚と脳浮腫について」2014年4月13日、tumblrより）

私たちの社会生活は、多くの部分を視覚と言語の認識と処理に依存しています。これらが誤動作すると、情報のインプットにもアウトプットにも齟齬が生まれてきます。医療ケアの従事者はたくさんの患者を相手にするため、一人にあてられる時間が限られています。患者さんの状態をスピーディに判断し、処理すること必要があるのです。しかし感覚的にまとまらず、言語化できない本人の苦しみはどうすればいいのでしょうか。ここには家族や友人の支え、いわゆるインフォーマルなケアが求められます。インフォーマルなケアでは感情を伴った関わりが必須となります。たとえば、見舞いに来る人の気遣いや心配、言葉だけではない励まし、患者を信じて待つことなどがインフォーマルなケアを構成します。社会福祉では、こうした感情的な支援も重要な支援であり、影響力が大きいことが知られています。

作品中でも、不摂生で家族との関係をおざなりにしていた村上さんと、家族とのやりとりがあります。夜の病室で付き添ってくれた上の弟さんとのやりとりが描かれています。明かりを消してベッドサイドで寝ようとする弟さんに「いろいろ、ごめん」と謝る村上さん。弟さんは次のように話します。

「ぼくは、お前が倒れたって聞いたとき、やっぱり心配した。ざまあみろとかは思えなかった。好き勝手やってたのは知ってる。甘ったれてるし。僕はお前のそういうところが嫌いだった」。「お前が目を覚ましたとき、『どうして死なせてくれなかったの？』って言うかもって思った。でもお前は『ありがとう』って言ったから、死にたかったんじゃないんだと思った」。

（その⑨より）

フリーランスの仕事がきつく、自分を追い込みすぎる日常生活を送っていた村上さんは「ゆるやかな自殺」のような生活の末に、冒頭の状態に陥ったのでした。

社会福祉では「当事者中心」「エンパワメント」が重要とされますが、危篤状態になった患者へのケアにおいては、身近な家族を巻き込んだ支援体制の構築が欠かせません。患者家族がエンパワーされていなければ、患者自身への支援は急速に弱体化しかねないからです。このような事態に陥らなかった村上さんは恵まれていたと言えるでしょう。

「自分が生きているのは、なんとなくで、勝手なもんだと思ってたけど、誰かの心の上に成り立っているものなのか」という気づきが、村上さんのもとに訪れます。助けようとする医療者のケアに加えて、

毎日寄りそってくれる家族や友人のケアが支えとなり、人生をやり直すようなリハビリに立ち向かうことができるようになっていきます。

本書の末尾には、村上さん自身による、脳浮腫症状の説明、主治医による診断書やメモの一部などが載せられています。脳が腫れて圧迫された危篤状態からの生還により、もともと感じていた生活実感にどの程度戻れているのかは、本人以外は分かりません。漫画というものは、この「本人にしか分かりえない状態」を説明するために、とてもよい表現方法なのかもしれません。私たちは視覚と言語の認識と処理により、実際には知らない人の経験をある程度、想像しながら共有できるからです。

ところで作者について調べると、回復後にネット上の同人活動において他者を誹謗中傷する行為を行ったという記載が複数見受けられました。同人活動とは漫画やアニメなど、趣味や好きなことを共有する仲間が集まり、二次創作作品を作ったり、イベントに参加したりする活動です。

当エッセイの筆者（迫）には、加害行為とされるものの詳細についてはよく分かりません。したがって、その行為について肯定も否定もするつもりはありません。ところで、本書『死んで生き返りましたれば』の感想レビューとして、「他者を中傷するような人物の作品だから価値はない」かのような批評が行われており、これについては違和感がありました。これは「対人論証」と呼ばれる論理的な誤りを示していると思われたのです。

「対人論証」とは、ある作品や事件について検討する際に、その作品の作者や事件の当事者の「人となり」を取り上げて、それを根拠に作品や事件の良し悪しを判断することです。たとえば大地震が起こったとき「津波が来る！」と叫んだ人がいて、その人が過去に万引き犯だったとします。「万引き犯の言うことなんて信用に値しない」という判断は「対人論証」の誤りを示しています。万引き犯だったことと津波が来るかどうかは関係がありません。

「そんなことを言っても、ルポルタージュ的な作品を書いている人が、回復後に加害行為をしていたと明らかになったら、作品全体が信用できなくなるじゃないか！」と思われる方がいるかもしれません。

感情的にはその思いも理解できます。医療関係者なら暗い気持ちにもなりそうです。しかし、ルポルタージュやドキュメンタリーが必ずしも客観的で公平な目線で描かれているとは限りません。むしろそういう作品ほど、作者による切り取りや強調、編集が行われているかもしれないのです。そして優れた作品を残した人が道徳的であるとは言えない、ということも指摘しておく必要があります。

当エッセイは、漫画作者の「人となり」を評価するものではありません。本作品そのものは死んでいてもおかしくない症状をいくつも抱えた状態で緊急入院した患者が生還し、社会復帰するプロセスを描いた漫画として、とても分かりやすく価値のある作品だと考えます。

紹介作品：村上竹尾（2014）『死んで生き返りましたれば』双葉社

参考サイト：村上竹尾（relative3）tumblr <https://relative3.tumblr.com/>（最終確認：2025.5.10）

※本エッセイで紹介した作品中のセリフなどは、読みやすくするために、意図を損なわない程度に改変している場合があります。

※ご感想・ご意見などは筆者のメールアドレスまでお寄せください。⇒ sakotomoya@gmail.com